九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[006]史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2344432

出版情報：史淵. 6, 1933-03-31. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

彙　報

九大史學會秋季例會

昭和七年十一月二十日（日曜日）第二學生集會所樓上に於て開催

一、講演會　午后一時半より開く、梗概左の通り、

臥亞と澳門とに就て　　教授　長　壽吉氏

臥亞と澳門の名は和蘭の亞細亞通交の先蹤としての、又切支丹傳導の背景としての意味に於て吾等に親く、而して和蘭の通交に關して、ハアグの文書が吾國人に由て種々研究されたのに比較して葡萄牙通交の研究は誠に少いと前提され大略次の如く述べられた。

和蘭ハアグの文書は寫しが可成多く吾國に來て居り又參照すべき諸著述も注意されて居るが、葡萄牙のものは餘り世に唱へられない。然しこの方も隨分多くある。葡萄牙通交關係の文書記錄著書を見るにリサボン市國立圖書館の「トンボ塔の文書」を始め地誌、旅行記、交通資料蒐集書、日件錄等數多く貴重のものがある。

葡人の海外發展は後世の世界開拓者たる國々の人のやうに民族的差別觀は多くなく例へは帝國主義の發展などの見解を以て之を見るのは誤りである。このことは吾國との通交關係上に參照すべき所かと思はれる。

ゴアを中心として葡人の東洋經營は商業的のものと云へるがマカオを中心としたる葡人の東洋經營は商業と傳導とが明かに別々になつて、之が政治的に統制された。この狀態が直接吾國に關係したのである。プユカナンの旅行記にゴアは宏壯なイエズイタ式建築の寺院の都であつたことが見られる。

マカオは一五五七年支那皇帝から金印敕書Chpa ouroに由て許されて葡人が占據したとなつてゐるが、この語は然し元來の葡語でなくマカオ訛（バトア）であらう。概して吾國語に入つた葡語はマカオを經たマカオバトアが多い。コンフエト、カステラの如き。

最後にマカオのサンポウル寺院は東洋傳導の本山で今廢址の殘れるものはその後一六〇二年の建築。ジエスイ

ト式後期ルネサンス建築で宏壯美麗東洋唯一のルネサンス建築であらう。爰で一五九〇年に天正羅馬使節紀行の羅典文本が印刷された。スウサによればこの建築に當つて多くの日本人信徒が優秀な技能を發揮したことが見られる。葡人又マカオを通じてルネサンス藝術は何等かの影響を吾國の諸建築の上に與へたであらうかと云ふことが考へられる。（益田）

支那南北朝末期の佛像に關する知見の補遺　名譽教授　中川森彦氏

當日講演會場には十數軀の南北朝時代の支那の金石像が陳列せられ博士は初づこれ等各々に就いて如何に優秀なる逸品傑作であるかを一々説明された。數多い尊像の中にも特に次の二軀は目立つて立派なものであつた。

丸彫菩薩立像（黑石灰石像總高二尺四寸、門司市加藤守夫氏藏）臺座ノ銘「大齊武平五年甲午九月朔日孟津邑子司馬桓疾其父禱於安國寺越二日乃痊敬造石像一區同心供養所求如意」

鑄金菩薩立像（金銅像總高五尺一寸三分、福岡市三苫寛一郎氏所藏）臺座ノ銘「大魏孝昌元季歲次乙巳秋八月中書舍人徐紇奉皇太后詔敬造金石像六區建立永寧寺願四方乂安國祚永隆」

これ等の諸像は何れも充分支那化され渾成圓融の美的創造であり西方異國の模倣に甘ぜず先進固有の長所を啓發し獨特の氣分を漲溢せる美的精華を發現せる代表的秀作である事を明かにされた、就中舊永寧寺安置の北魏銅像と舊安國寺奉安の北齊石像とは現存せる支那六朝に於ける佛教彫刻遺品の雙美と云ふべく超越せる神逸精妙の極大傑作と賞嘆しても過言で無い。博士は此等の諸像の研究よりして支那南北朝末期を以て佛教彫刻の哀頽期なりとする從來の學説を以て無稽の妄説謬見なりと斷じ寧ろ當代は創意深長漸次古拙の風貌より脱出し崇高と優美とを綜合し眞意と寫實を融合せしめて間然する所無き一種の卓絶せる美的彫刻を創造する域に達したものと論ぜられた。

吾々は居ながらにして支那本土にさへ遺品稀なるこの比類なき天下の珍寶に接する事が出來又熱意溢るゝ博士の御説明を聞き驚嘆敬愛歡喜の念に絶へなかつた（鏡山）

二、晩餐會　午后五時半より開く、食后の研究發表左の如し

一、傳習館の聖像に就て　岡　茂政氏

一、「仁」の語原　戸上駒之助氏

一、慶州旅行談　青木　義憲氏　鏡山　猛氏

此の日中山博士には前記の如く態々南北朝末期の佛像約二十軀を將來され、約二時間に亘る御講演を賜つたのであるが、尙ほ翌日午前十時から午后三時迄法文學部大會議室に於て學内有志のため再び尊像を陳列、拜觀の

機會を與へられた、末筆ながら謹で感謝の意を表し奉る。（山本）

受贈雜誌（昭和七年十二月以降）

皇學（一、二）　神宮皇學館々友會
國史學（一三、一四）　國學院大學國史學會
史潮（二ノ三）　大塚史學會
國立北平圖書館々刊（六ノ四）　國立北平國書館
東洋文化（一〇二、一〇三）　東洋文化學會
史學研究（四ノ二）　廣島史學會
龍谷史壇（一一）　龍谷大學史學會
史觀（二、三）　早稲田大學文學部
史林（一八ノ一）　京大史學會
青丘學叢（十）　青丘學會
龍谷學報　龍谷學會

昭和八年第一學期史學關係講義題目（數時ハ一週時間數）

國史

特講、中世に於ける王法即佛法思想（二）　長沼　教授
演習、古文書講讀（二）　仝
仝　江戸時代記錄講讀（二）　仝
演習、古代（四）　竹岡　教授
東洋史
清朝史（四）　井上　講師
唐代史料の研究（二）　仝

西洋史

西洋史概說（一八三〇年以後）（二）　長　教授
演習（B）（二）　仝
仝（A）（四）　仝

其の他の諸學科

奈良朝文學史概論（二）　春日　教授
中世文學思潮（國文學）（二）　小島助教授
宋學史（二）　楠本　教授
印度寓話文學の思想に與へし影響（二）　干潟　教授
基督教と希臘思想との調和（二）　佐野　教授
哲學概論（精神史學概論）（四）　鹿子木教授
西洋古代及中世哲學史概說第一部（四）　四宮　教授
西洋近世哲學史第一部（四）　中島　教授
西洋倫理學史（四）　大島　教授
王朝末期に於ける文藝思潮（佛文學）（二）　成瀨　教授
佛文學史概說（十九世記に於ける文藝思潮の變遷）（二）　須川助教授
獨逸文學史（ゲーテ以后）（二）　小牧　教授
獨文學史概說（二）　佐藤助教授
日本法制史（四）　金田助教授

昭和八年史學科卒業論文題目

國史專攻

一、南朝皇胤の研究　足立　浩
一、元亨釋書の研究　伊藤　弘
一、佐藤信淵の社會政策理論　加宅田重載
一、近世に於ける武士道論の發生　下川　士道
一、東大寺の歴史的創草と教理的創草　西島　寛
一、諸神本懐集に於ける神道觀　波多　信道
一、上代に於ける神代觀念の發達（選科）　榊原　末一

國史例會

第十八回例會（昭和七年十一月廿六日）

午后三時半より第二學生集會所五號室に於て開會、竹岡教授御出席（長沼教授所用の爲缺席）山本、鏡山、青木各副手學生十七名、相會して左の報告あり教授の講評後散會六時半、

一、駿臺雜話の一考察　武藤　正行君
一、平賀源内考　金倉　堅城君

第十九回例會（昭和七年十二月十日）

午后三時半より開會、長沼教授、（竹岡教授は所用の爲缺席）三副手、學生十八名出席左記報告後講評ありて散會、

一、宗氏と外交　中川　勇君
一、蓮如と三河の眞宗寺院　青木　副手

第二十回例會（昭和八年一月二十一日）

午后三時より、長沼、竹岡兩教授の御出席、三副手、學生二十名の出席を得て開會、講評終了後、直ちに新三浦に於ける送別會場に向ふ

一、近世の高利貸について　田中　滿君

次いで足立、西島兩君の卒業論文發表あり、題目は別掲參照、

第二十一回例會（仝年二月八日）

午后三時半より長沼、竹岡兩教授、山本、青木兩副手學生十五名出席、今回は下川、波多兩君の卒業論文發表あり、その後兩教授の懇篤なる講評ありて散會、右題目は別掲參照、

第二十二回例會（仝年二月二十五日）

今年度に於ける第八回の例會を三時半より開く、長沼竹岡兩教授御出席、三副手、學生二十名相會す、今回は伊藤君の卒業論文發表あり（題目は別掲參照）懇切なる講評ありて本年度最終の會を閉ぢた（安河内）

西洋史研究會

第四十四回例會（昭和七年十月十日）

William Barry: The papacy and modern times (1303—1870), Pope Pius IX の紹介　德永麟之助

Heinrich v. Sybel u. der Staatsgedank の紹介　和田　光子

Heinrich Otto Meisner: Gespräche u. Briefe Holsteins. (Preussische Jahrbücher, April—Mai 1932.) の紹介　小林榮三郎

第四十五回例會（昭和七年十一月二十二日）

Leonald Woolf: Imperialism and civilization, 1928. の紹介　金　成植

Henri Sée: La Science et la philosophie, de l'histoire, chap. VIII. Peut-on concevoir une philosophie de l'histoire scientifique? の紹介　伊岐須　清

第四十六回例會（昭和七年十二月十六日）

Harold. J. Laski: The Socialist tradition in French Revolution. の紹介　前崎　吉男

第四十七回例會（昭和八年一月二十四日）

Hermann Cohen: Deutschtum und Judentum, Berlin 1924 の紹介　鄭　賢奎

Hayes: The historical evolution of modern nationalism の紹介　益田　健次

第四十八回例會（昭和八年二月十日）

De la manière d'écrire l'histoire en France et en Allemagne depuis cinquante ans. (F. de Coulanges: Questions contemporaines pp. 1—27) の紹介　金　成植

Alfred Francis Pribram: England and the International Policy of the European Great Power の紹介　手塚　一夫

支那學研究會

昭和七年九月八日例會

午後五時より第二學生集會所に於て例會を催す。研究題目及發表者左の如し。

李氏焚書　重松　教授

太極圖說考　岡田　武彥

當日の出席者

重松教授、楠本教授、山内講師、專攻の學士學生十二名。

重松教授送別會

重松教授佛蘭西御留學に際し昭和七年十月六日、午後六時より送別會を新三浦に開催す。出席者重松教授以下東洋史專攻の學士學生等六名。終つて第二次會に移り、十一時過ぎ盛大裡に散會せり。

昭和七年十一月十七日例會

岡井、井上兩講師の御來講を期し、兩講師の歡迎會を兼ね例會を第二學生集會所に開催。兩講師の支那學研究の態度に付き有益なる御話ありたり。散會午後九時盛大を極む。

當日の出席者、楠本教授、山内、岡井、井上の三講師

專攻の學士學生十二名。

昭和八年一月二十八日例會

午後六時よりを第二學生集會所に開催す。

研究題目及發表者左の如し。

最近支那文壇の展望　城大助教授　辛島　曉氏

當日辛島城大助教授は上海よりの御歸途、博多驛より直ちに御來學、最近支那文學の新傾向に付き時餘に亘り其の一端を發表さる。當日御多忙中にも拘らず、本會のため特に貴重なる時間を割かれしことを感謝してやまぬ。當日の出席者左の如し。

楠本教授、辛島城大助教授、專攻の學士學生十一名。

昭和八年二月九日例會

午後五時より例會を第二學生集會所に開催す。研究題目及發表者左の如し。

老子宇宙論の一考察　大濱　晧

古代刑罰の目的　國行　一男

當日の出席者左の如し。

楠本教授、井上教授、專攻の學士學生十一名

昭和八年二月二十四日例會

午後十二時三十分より岡井講師の送別會を兼ね例會を開催す。半年に亘り深遠なる御講義を拜聽するを得しは吾々に感銘する所あり。先生の御努力を謝す。

當日の出席者左の如し。楠本教授、岡井講師、專攻の學士學生八名、及專攻外の學生十數名。（國行）

九大史學會規則

第一條　本會ハ九大史學會ト稱ス

第二條　本會ハ史學ヲ研究スルヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ史學ニ篤志ナルモノヲ以テ會員トス
　會員ハ賛助會員及ヒ通常會員トス

第四條　本會ノ事業左ノ如シ
　一、例會、大會　二、會報ノ發行
　三、史學研究ニ必要ナル事業

第五條　本會ニ委員若干名ヲ置キ委員會ヲ組織ス
　委員ノ任期ハ一ヶ年トス

第六條　次期委員ハ毎年改選期ニ現在委員ノ投票ニ依リテ之ヲ決ス

第七條　委員會ハ本會ノ事務ヲ議決ス

第八條　本會ニ庶務係會計係若干名ヲ置キ委員會ノ決議ニヨリ本會ノ事務ヲ分掌ス庶務係及會計係ハ委員中ヨリ之ヲ互選ス

第九條　賛助會員ハ特ニ本會ノ事業ヲ助クルモノトス

第十條　本會ニ入會セントスルモノハ本會々員ノ紹介ヲ要ス　賛助會員ハ委員會之ヲ推薦ス

第十一條　會員ハ住所變更ノ都度之ヲ本會事務所ニ通知ス可シ退會セントスル者亦同シ

第十二條　會員ハ會費トシテ年額金一圓ヲ醵出スルモノトス

第十三條　會費滯納ノモノ又ハ本會委員會ニ於テ不都合ト認メタル者ハ除名スル事アルヘシ

第十四條　本會事務所ヲ九州帝國大學法文學部史學研究室内ニ置ク

第十五條　本規則ノ變更ハ委員會ノ決議ニ由ル

本年度委員

長　壽吉
重松俊章（在外研究中）
長沼賢海
竹岡勝也
大村作次郎
（以下五十音順）
青木義憲
鏡山猛
國行一男
益田健次
森住利直
山本健二
川崎正男
金成植
手塚一夫
中川勇
檜垣元吉
白水雪（庶務會計）

書記